山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第39号
令和４年5月31日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより

戦時下・敗戦直後の地方詩壇
――『防長文学』『山口県文学』に寄稿した詩人たち

中　原　　豊（中原中也記念館・館長）

現存する『防長文学』３冊とその後継誌である『山口県文学』12冊は、1943〈昭和18〉年10月から1945〈昭和20〉年10月にかけて、完全な月刊ではないまでも定期的に刊行されている。そこに掲載された詩や詩論には、戦時下および敗戦直後における、山口県を中心とした地方在住の市井の詩人たちの活動を見ることができる。

両誌に詩や詩論を寄稿した詩人はおよそ98名。前身の『詩園』同人（林かほる、村田富久太、和田健ら）や「山口県文学報国会」役員で編集実務等を担当していた石中象治、桑原圭介、小泉喜代一らを除く一般の寄稿者はおよそ79名になる。出版そのものもそうだが、日常生活にも多くの困難があったことを考えれば、これは決して少ない数ではない。しかも、『山口県文学』第２巻第４号（1945年４月）の林かほる「あとがき」で「投稿作品の数がうんと増加したこと」が報告されているのを見ると、この時期に市井の詩人たちにおいても創作活動が続けられていたことがうかがえる。

詩作品として見るならば、当時「愛国詩」「国民詩」と呼ばれた内容のものが多い。時代的には当然ともいえる傾向だが、決してその一色に染められているわけではない。例えば『詩園』から改題された直後の『防長文学』第５巻第９号（1943年10月）の詩欄は、一段組のパート（『詩園』同人や同誌からの寄稿者）と二段組のパート（選考された新たな寄稿者）合わせて18篇の詩が掲載されているが、「愛国詩」「国民詩」に相当する内容をもつ詩とそれ以外の詩の割合はほぼ半々である。同号の和田健の評論「今日の詩心」には「先づ空虚な言葉の前に、つましい詩のこゝろを生活すべきではあるまいか。そして聖戦は豊かに激しく今日の詩心を養ひ育てゝゐることを私は疑はない。」という一節がある。こうした戦時下を生きる自己の生活感情や思考を表現することによって時代の要請に応えるという考え方は、林かほる、桑原圭介など編集や投稿詩の選考など中心的な役割を担った他の詩人の文章にも見出せる。『山口県文学』と改題された後は「愛国詩」「国民詩」の割合が増えるが、語調こそ激しいものの「日常の生活から生れ出る一発の詩弾こそ未曾有の国難を突破する力となる。」（林かほる「あとがき」、『山口県文学』第２巻第４号　1945年４月）にも異口同音に繰り返されているのである。

投稿詩に注目してみると、時局への向き合い方も表現も作者によって様々であったように思われる。計８篇が掲載され選評で高い評価を与えられている三田村守吉の詩は、典型的な悲憤慷慨調の「愛国詩」であり、敗戦直後の第２巻第９号に発表された「愁び（ママ）の秋」においても敗戦の嘆きを同じ調子で表現している。計11篇が掲載され、同じように高い評価を受けて『詩園』同人たちと並ぶパートに掲載されたともある荒川孝子の詩も「愛国詩」を中心としているが、敗戦直後には「夫病む日」という実生活に取材した詩を投稿している。『防長文学』『山口県文学』に掲載された詩では、こうした市井詩人たちが示す諸相も地方詩壇の一面として見逃せないだろう。

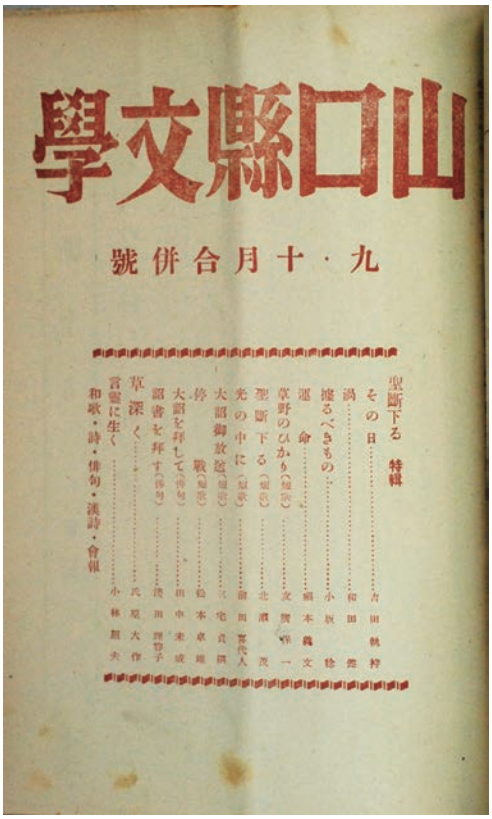
『防長文学』と『山口県文学』
――戦時下の〈やまぐち〉の文学――

加　藤　禎　行（郷土文学資料センター・研究員）

1943〈昭和18〉年８月５日に『詩園』第五巻第八号が発行された２ヶ月後、10月５日に『防長文学』９・10月号が発行された。本号目次頁には「（詩園改題）」とひっそり添えられており、新聞掲載の出版広告（『関門日報』1943〈昭和18〉年10月２日）は、「山口県総合文芸雑誌／防長文学／十月号／価50／麗はしき防長の山河に『防長文学』あり、伝統の防長精神文化は脈々として誌中に溢る、我が郷土の新しき文学総結集塔がこれ。（県下有力書店及び駅売店で販売）／発兌・県出版会社」と述べている。下村章雄「万葉人について」（９・10月号）、友廣保一「吉田松陰の歌」（新年号、1944〈昭和19〉年１月１日発行）、兼崎地橙孫「決戦下俳句の向途」（春季号、1944〈昭和19〉年５月25日発行）といった時局に対応した文章を掲載しながらも、『防長文学』は詩、短歌俳句の掲載欄を維持しつつ刊行されていった。

しかし『防長文学』は、山口県文学報国会の設立によって名称変更を余儀なくされる。「山口県文学報国会　９日発会式挙ぐ　部会、事業、役員等も決定」（『関門日報』1944〈昭和19〉年６月10日）は以下のように述べる。「郷土文学者の総蹶起によりその文学精神を結集して一億戦列の推進力たらしむる使命をもつて結成された山口県文学報国会発会式は九日午前十時半から山口市県教育会館　熊谷知事、磯部翼賛会事務局長外準備委員及び会員並に来賓多数参列して開催された、準備委員を代表して作家氏原大作氏から結成に至るまでの経過報告があつた（以下略）」。この山口県文学報国会の機関誌として創刊されたのが『山口県文学』であった。創刊号は1944〈昭和19〉年10月１日発行で、発行所は山口県出版株式会社、発行兼印刷人が村田公亮と『詩園』第五巻第八号以来の発行体制で『山口県文学』は新創刊されているが、実質的に『防長文学』の後継誌である。以降1945〈昭和20〉年８月１日まで、『山口県文学』は毎月１日に月刊刊行を保ち11冊が刊行された。

「県文報を改組　機関誌は改題継続」（『防長新聞』1945〈昭和20〉年９月３日）では、『山口県文学』終刊の事情を以下のように伝えている。「県文学報国会では戦争終結に伴つて必然的にこの組織、性質ともに改変の要に迫られたので近く理事会を開き今後の方針などにつき協議する、同会は昨年六月県下の各種文学分野を結集して発足し雑誌「山口県文学」を発行するとともに文学を通じて戦力の培養と闘魂の振起に着手、約一千名の全会員が一体となつて思想戦の第一線に活躍して来たが、情勢の急変に伴ひ従来の組織機構では今後の事態に処して真の実力を発揮することは至難と見られる（中略）なほ同会ではこの程緊急編集委員会を開き九月号の編集方針を審議した結果、八月十五日以後の激変に際して文学者の在り方を中心に筆陣を揃へることに決定して、近く発行される「山口県文学」の発行はこれを最後とし「文学風土」＝仮称＝と改題して続刊する模様である」。12冊目の『山口県文学』９・10月号（1945〈昭和20〉年10月１日）は、こうした事情を反映した編集となっており、特輯「聖断下る」に吉田執持「その日」、和田健「渦」、小坂稔「據るべきもの」他を掲載している。



『山口県文学』昭和20年９・10月号

『防長文学』『山口県文学』と『詩園』の同人たち

原　　明　子（中原中也記念館・学芸担当職員）

戦争の激化に伴い、文学者たちの組織化、統一化がより一層進められるなかで、昭和18年、『詩園』の後継誌として『防長文学』が発行された。そこには、和田健、長谷執持、林かほる、福冨武人、白石軍司ら、『詩園』に集ったメンバーも参加している。『詩園』は昭和13年に創刊、現在27冊が確認されているが、最終第5巻第8巻は短歌や俳句も取り入れた「山口県総合誌」として発行された。『防長文学』はこの『詩園』最終号の内容を踏襲し、「従来の詩誌“詩園”を改題し、之に歌壇、俳壇その他を合流して生まれたのがこの“防長文学”である」（『防長文学』創刊号）としている。

しかし『防長文学』の内容は、それまで詩を中心としてきた『詩園』とは大きく異なる。ページをめくると、最初に掲載されているのが短歌であり、その次に俳句、それからようやく詩が登場する。ページ数も少なく、詩が隅に追いやられている感は否めない。また、『詩園』が掲げていた中原中也ら郷土の文学者の業績を積極的に顕彰し、その衣鉢を継ごうとする姿勢も見られない。

そのようななかで、元『詩園』の同人たちはどのような詩を発表していたのだろうか。『防長文学』昭和18年10月号（創刊号）を見てみると、福冨武人「老梅の家」、白石軍司「松風」、和田健「昔の町」といった詩が並んでいる。『詩園』の流れをくみ、日々の生活や四季折々の情感を歌ったものも多いが、そこには「皇国の有難さ」（「老梅の家」）、「大東亜黎明の光」（「松風」）といった、時局を意識したような言葉がところどころにあらわれ、林かほる「霧の中の奇蹟 ――キスカの神兵に捧ぐ――」といったタイトルの戦争を題材した詩もある。

昭和19年10月には、『防長文学』にかわり山口県文学報国会の機関誌として『山口県文学』が発行され、ますます戦時体制へと組み込まれてゆく。創刊号には、和田健「帰営の歌」、白石軍司「蓮田」「啓示」、小泉喜代一「菊といのち」といった詩が掲載されたが、雑誌全体の誌面も減少したこともあり、詩のページはさらに縮小されている。その後、次第に『山口県文学』に寄稿するのは和田、林、白石、小泉喜代一といったメンバーに限られるようになる。

昭和20年に入ると、4月号に和田「今日を生きる文学」、8月号には「特輯 報道文学」として和田「義勇隊出動」、小泉「建設の唄」、林かほる「焼夷弾」といった作品が掲載されるが、いずれも随筆であり、元『詩園』のメンバーたちの詩作品は次第に誌面では見られなくなっていく。『山口県文学』は昭和20年8月15日の終戦後、同年10月に9・10月合併号を発行し終刊となるが、本号には「聖断下る 特輯」の一つとして、和田の随筆「渦」が掲載されているのみである。

以上簡単であるが『防長文学』『山口県文学』の詩を見てきたが、山口の詩の発展を目指して『詩園』を発行した同人たちが、時代に翻弄されていく様が垣間見えるのではないだろうか。

『防長文学』『山口県文学』における短歌・俳句

髙　張　優　子（山頭火ふるさと館・学芸員）

詩の雑誌として刊行されていた『詩園』から『防長文学』への移行に伴い新たに参入したもののうち、主なものが短歌と俳句である。

短歌では、友廣保一、竹内八郎、大田哀歌鳥、中島如水、橋爪秀雄、橋本武子、岩松文彌等非常に多くの歌人が作品を寄せており、ほとんど毎号延べ70名以上の作者を数えることができる。彼らの多くが『防長文学』『山口県文学』ともに参加しているが、大田哀歌鳥は、『防長文学』昭和19年春季号に掲載した「禿筆雑記」にて、友廣や竹内等の歌について「いささか遺憾に思ふ」と批判をし、『山口県文学』からは姿を消している。

彼らの作品を見ていくと、その多くが直接的あるいは間接的に戦争を詠んでいることが分かる。

たんねんに切りて遺せし子の爪の三日月なりにあるを愛（かな）しむ　（子等は征く・橋爪秀雄）①

敵十字砲火の眞只中に天兵くだるこの民族のこの力はや　（人雷・中島如水）②

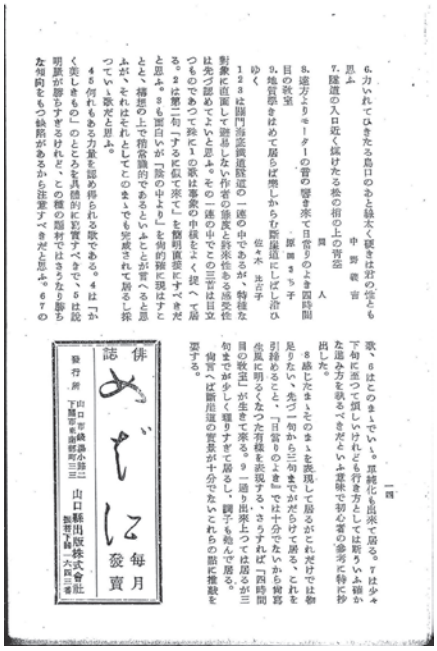
この二雑誌の歌壇の中心にいた友廣は、万葉主義を掲げる歌誌『アララギ』に属していた。「万葉集」は戦時下において、戦意高揚や愛国心を表現するために利用されたという歴史があり、『防長文学』『山口県文学』にもその片鱗が伺える。

さて、俳句については、『防長文学』では兼﨑地橙孫が選者を務め、ほかに山縣瓜青・古屋醉紅などが作品を掲載していた。参加人数は少なく、最も多い昭和19年新春号で延べ31名。一方『山口県文学』では、水田のぶほ、高橋飄々子、梅田磐翠、伊藤無門等多くの俳人が加わり、ほとんど毎号延べ50名を超えている。その中心にいたのは、俳誌『めばえ』主宰の柳星甫であった。

この変化は、『めばえ』が昭和19年5月まで刊行されており、『防長文学』には統合していなかったことが要因である。実は『詩園』5巻8号（18年8月）の編輯後記において既に、一県一誌の総合文学雑誌となる要請に対し「【俳誌】の方もぼつぼつ腰をあげて貰ひたいものだ」と書かれているが、これは暗に『めばえ』を指していると考えられる。

『めばえ』の統合によって『山口県文学』では俳句作品数が一気に増えている。俳句投稿欄の見出しである「芳雲集」「草土集」や、芳風山人すなわち星甫によるコラム「面壁獨語」は、『めばえ』を踏襲してそのまま使われており、『山口県文学』俳壇の中心に星甫と『めばえ』が存在していたことが分かる。

俳句作品については、戦争を詠んでいるものは短歌ほど多くない。時局下における作句について論ずる文章は、地橙孫による「決戦下俳句の向途」③等いくつか掲載されているが、『山口県文学』昭和20年5月号の会報欄において「殊に本誌發行の目的が文學を通じて戦力増強に貢献し、最後の勝利を獲得せんとするにあるのであるから今後の投句は主として戦時下に於ける街頭風景、増産生活、動員生活、日常生活、闘病生活並に敵前敢闘を十七字にものした作品を送って頂きたい。」とわざわざ書かれている。ホトトギス派の『めばえ』を中心とした俳人たちは、その花鳥諷詠を戦時中においても捨てきらなかったと言えるだろう。



『防長文学』（昭和18年9,10月号）より
『めばえ』広告掲載ページ

① 『山口県文学』昭和19年創刊号（同年10月）
② 『山口県文学』昭和20年3月号
③ 『防長文学』昭和19年春季号（同年5月）

郷土文芸誌の著作権調査を行ってみたら

井　関　和　彦（山口県立山口図書館・主査）

貴重な資料を長く保存しつつ、利用に供する、というのは、図書館の使命であり、永遠の悩みでもあります。保存と利用を両立させるため、最近では、資料を撮影・デジタル化して、特にウェブ上に公開して利用に供し、原本は保存する、という取組が行われるようになりました。そのためには、著作権の調査を行う必要があります。資料に掲載された作品には、それぞれ著作権があり、その保護期間内は著作者（あるいは著作権者）に断りなくウェブ公開することはできない[①]からです。

著作権の調査で重要なことの一つは、著作者の没年を調べることです。著作権の保護期間は著作者の没後70年[②]とされているため、その著作者がいつ亡くなったかを知ることが重要なのです。また、少なからぬ作品が変名（筆名・歌号・俳号など）で発表されているため、本人特定（実名）の調査も必要です。

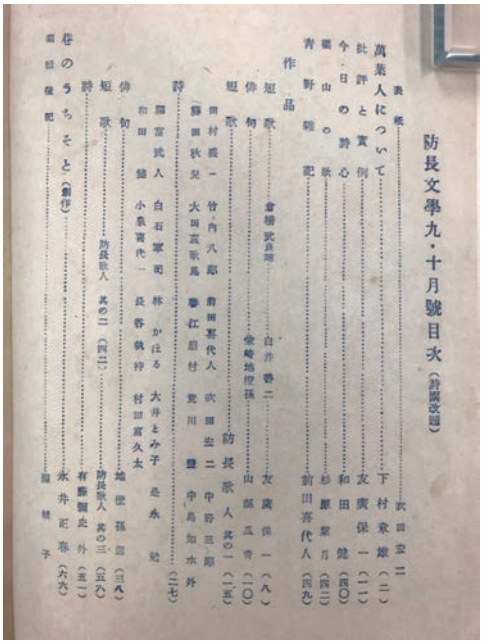
仮に、郷土文芸誌『防長文学』（山口県出版）について、デジタル化・ウェブ公開を行うとすると、作業の流れとしては、公開を予定する雑誌の著作物・著作者をすべてリストアップし、本人特定及び没年調査を行い、必要に応じて権利処理を行うことになります。今回は、ひとまず簡易な方法[③]で、著作権調査を行ってみることにします。

『防長文学』1巻1号（1943年）を対象に、掲載された著作物をリストアップすると、表紙絵や編集後記なども含め、147件でした。著作者としては、『防長文学』の前身誌『詩園』の中心的なメンバーであった和田健（2013年没）、林かほる（1966年没）、長谷執持（1950年没）、村田富久太（没年不明）などのほか、友廣保一（1993年没）、橋本武子（1992年没）、兼崎地橙孫（1957年没）など、戦後も活躍するよく知られた文学者たちの名前が見えます。また、作品として短歌のみならず絵が表紙として掲載されている吹田宏二（没年不明）や、前田喜代人（没年不明）の批評中に作品が引用されている田中四郎（1945年没）のように、著作物の現われ方は様々です。

調査の結果、本人特定ができた著作物は延べ43件でした。簡易な調査とはいえ、延べ104件、約7割は本人特定ができず、没年も不明でした。次巻以降の調査では重複する著作者も増えると思われますが、たった1号分の著作権調査でも、なかなか困難なものでした。

ウェブ公開にまでこぎつけるかどうかは別として、こうした著作権調査はとても重要だと思われます。それは、必ずしも知られていなかった著作者の足取りをたどり、その著作者と作品に再び光を当てる試みです。ある意味、多くは物故者であろう著作者と、その埋もれた作品の、「供養」に近い行為なのかもしれません。

（この小文は、クリエイティブ・コモンズ表示4.0ライセンス（CC-BY）で公表します。）



『防長文学』1巻1号目次

---

①本来は、著作物の複製（撮影・デジタル化）も著作者の許諾なく行うことはできないが、図書館はその所蔵資料を「保存のため」に複製することができる。（著作権法31条1項2号）

②団体の著作物、無名・変名の著作物は、公表後70年。（著作権法52・53条）

③本来であれば、当時の『文化人名録』『文芸年鑑』ほかの資料を確認する必要があるが、ここでは、山口県関係の人名録等の項目を広く収録したウェブ情報源「ふるさと文献情報検索」（山口県立山口図書館）を活用して調査した。
https://library.pref.yamaguchi.lg.jp/wo/furusato/srh/

寄贈図書（2022年1月～2022年4月）

大内文化探訪会『大内氏歴代当主とゆかりの地』、小川美日『句集 和をりづる』、田村梯夫・平山智昭『戦国歴史秘話 長州初代藩主毛利秀就公総括版－誕生の真実追及－』、山口県『山口県史 通史編 現代』

寄贈雑誌（2022年1月～2022年4月）

『火山群』第58号（岩国文学協会）、『其桃』第920～922号（「其桃」発行所）、『すばる』第56号（すばる俳句会）、『中原中也記念館館報2022』第27号（中原中也記念館）、『和海藻』第37号（豊北郷土文化友の会）、『風響樹』第54号（風響樹同人）、『颷』第119号（颷文学会）、『文芸山口』第361～362号（山口文芸懇話会）、『山彦』第167～168号（山彦発行所）、『るる』第1～5号（現代詩／詩論研究会）

『諸家短冊帖』より金子兜太の句
「果樹園がシヤツ一枚の俺の孤島　兜太」

編集後記

今号では、『防長文学』『山口県文学』について、中原豊（中原中也記念館・館長）・加藤禎行（郷土文学資料センター・研究員）・原明子（中原中也記念館・学芸担当職員）・髙張優子（山頭火ふるさと館・学芸員）・井関和彦（山口県立山口図書館・主査）各氏にご寄稿いただきました。なお、これらは令和３年度受託研究「「やまぐちの文学者たち」に係る調査・研究」の成果の一部です。

令和４年４月１日、下森勇二様より、山口県立大学名誉教授・上野さち子氏旧蔵資料をご寄贈いただきました。上野氏は、郷土出身の俳人・田上菊舎の研究で知られ、俳句実作者としても活躍されましたので、旧蔵資料も俳句関係のものが多くございました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。（菱岡憲司）

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-0021　山口市桜畠6-2-1）
TEL.（083）929-6243
■発行日：2022（令和4）年5月31日